

空想を物語に

小説を書く楽しさ

皆さんには、空想癖がありませんか。

私は、幼少の頃からこの癖（というよりも、ほとんど病に近い）が深刻で、他の人たちと同じような日常を送っているように見えても、頭の中ではまったく異なる思索を巡らしていました。あるときは、自分だけの架空世界を脳裏に描いてみたり、あるときは、小説、漫画、テレビドラマ、映画などの既存の作品を自分好みにアレンジして、違うストーリーに練り直してみたり、あるときは、たまたま遭遇した事象に連想を働かせてみたりと、気ままに際限なく想像を膨らませて、それを秘めやかな悦楽としてきました。

この癖は、年齢を重ねるごとにますますひどくなり、川面をかすめて跳ねる小石のように、思考が一ヶ所にとどまらずに、あらゆる方向に飛んでいつ

しまうこともしばしばです。こんな風に、普段からぼんやりとして、なにを考えているか分からない私は、家族の目から見ても相当な変わり者に映るらしく、いい大人になった今でも、呆れ顔をされるのがよくあります。

いつしか私は、そうした自分の頭でこね回していた妄想を、文字に変換し、小説として表現するようになっていきました。それは、元来、不器用で、これといった特技も才能もなく、余暇を無為に浪費するしかなかった私にとつて、ほとんど唯一の趣味となりました。

あらためて考えてみると、小説を書くことは、ある意味、理想的な娯楽といえるかもしれません。経費は大してかかりませんし、もとは頭の中で考えたものですから、場所や時間を問わず、それこそ、通勤時間中の車内でも構想



竹中 亮
横浜市経済観光局

【たけなかりょう】1967年、静岡県生まれ。1992年中央大学法学部政治学科卒業、同年横浜市役所に入庁。2006年第十三回九州さが大衆文学賞・佳作を受賞。2007年第十四回九州さが大衆文学賞・大賞を受賞。

を練ることはできません。文章にする際に、多少の時間ひまがかかりますが、それも、筆一本（今は、パソコン一台というべきかもしれませんね）と紙があれば、後はちょっとした空き時間を利用するだけです。空気のごとく存在はしていても目に見えないイメージーションを、具象化するという作業は、創作に携わる者だけが味わうことのできる快感です。中でも小説は、誰でもその喜びに浸ることができ、最も手軽で簡便な手法といえるでしょう。

私ほど重症ではないでしょうが、皆さんも、現実からほんの少し離れて、頭の中で創った想像の世界で遊んだ経験があるのではないのでしょうか。それを、そのまま書き連ねるだけで、すでに物語であり、小説です。多少でも興味を覚えた方は、大袈裟に考えずに、まず

大賞受賞作が掲載された雑誌の表紙（ちなみに水城亮というのが私のペンネームです）（写真右）

佳作受賞時、授賞式での記念写真。左端が私で、その隣が夏樹静子さんです（写真下）



私の小説作法

小説の書き方は千差万

は気軽に筆を執ってみてはいかががでしょうか。書くことが苦手というだけで躊躇されている方もいらつしやるかもしれないませんが、初めからうまい文章を書こうとは思わずに、思いつくままに文字にしていけば、案外、すらすらと書けてしまうものです。そうして、一作を創り上げたときには、病みつきになっているかもしれませんよ。

別で、マニュアルというものはありません。百人いれば百通りの手順があるはずで、それぞれが自分のやり方で、着想し、筋書きを練り、文章にしていけばいいものです。そうした独自のスタイルを構築することも、小説を書く楽しみのひとつといえます。ただし、物語を創るという目的は同じですから、そこにいたる過程、方法が、似かよってくる場合があることも事実です。そこで、小説を書く際の私なりの標準的なプロセスを、概略ですが書き綴ってみましたと思います。皆さんには、こういったやり方もあるのか、という参考程度にいただければ結構です。

小説に限らず、いずれの創作においても、最初に必要となるのが、着想、アイデアです。アイデアは、創作の種であり、源泉ですから、最も肝要な部分といえます。良いアイデアが浮かべば、その時点で作品の半分が出来上がったに等しいとまでいえるでしょう。

それでは、どうすれば良質なアイデアが浮かんでくるのでしょうか。結論からいえば、万人に通用するアイデア製造法など、存在するわけがありません。のつけから、なあんだと思われたでしょうが、そんなうまい方法があるのなら、誰も苦労はしません。かといって、そう言い切ってしまうだけでは身も蓋もありませんから、私が着想を

得るにあたって心がけていることを、ひとつご紹介します。

私は、調べるということを自分に習慣付けています。新聞、テレビ、雑誌、書籍、街中のポスター、広告、等々。普通に生活しているだけで、身の回りには、実に様々な情報、媒体があふれかえっています。そこには、それまで自分が知らなかった言葉、物事が必ず含まれているはずなんです。私は、わずかも好奇心を刺激された事項については、なるべく早いうちに、自分なりに調べてみることにしています。かつては休日に図書館に行つて、関係する書物をあたらつたりしていました。今では、インターネットという便利なものが普及して、非常に助かっています。

話が多少逸れますが、何事につけて関心を持つようになると、日常が楽しくなつてきます。これは小説のネタに使えるかもしれないと思うと、それまで漫然と見過ごしたり、聞き流してきたことが、新鮮なものに映つてきます。これだけでも、実行してみる値打ちがあるのではないかと思います。

こうして調べた事柄のうち、特に興味を引かれたものについては、さらに関連する文献を読んだり、資料を集めたりして、詳細に調べていきます。こうしたことを繰り返していくうちに、自然とアイデアが浮かんでくるように



なります。

ここで重要なことは、思いついたアイデアは、忘れないうちにメモしておくことです。乱雑で構いませんから、片端から記録しておくことが大切です。ちなみに私は、アイデアについてはパソコンに頼らず、ノートに鉛筆でメモをするようにしています。これは多分に好みの問題となるでしょうが、私の場合、実際に鉛筆を動かして文字を書く方が、記憶に残りやすく、ひとつのアイデアから派生して、次のアイデアが生まれるといった連鎖反応を引き起こしやすいという頭の構造になっているようです。

次に、そうして得られたアイデアを

土台にして、大まかな枠組み、筋書きを組み立てていきます。主要な登場人物、舞台（場所）、時間軸（過去、現在、未来）なども、ここで決めます。これも様々なパターンがあると思われますが、私は、起承転結でいえば結の部分、すなわちラストシーンが先に浮かぶケースが多く、次に起の部分、導入部を思いつき、続いて起から結をつなげる承と転を組み立て、最後に全体を整えていくという順番です。

もちろん、これがベストというわけではなく、それぞれにタイプがあります。起承転結の順序どおりに整然と物語を紡いでいく人もいるでしょうし、始めに全体の構想が粗々と浮かび、徐々に具体的な形に上げていくという人もいるでしょう。どれが正しいというものではありませんが、あえていわせてもらえらるとするならば、結末はある程度、明確にしておいた方がいいように思います。ゴール地点を決めておかないと、どこに行っていくのか分からずに迷走するばかりで、最終的にまとめ上げるのに苦労します。

筋書きが組み上がったら、いよいよ小説として文章にする作業になります。実をいいますと、私はこの段階が一番、苦手です。色々なことを調べたり、アイデアを思いついたり、ストーリーを練ったりする時間は楽しいのですが、い

ざ、それを文字にしようとする、なかなか思ったようにはいかないというのが正直なところですね。特に書き出しは緊張します。皆さんも、せつかく書こうとしても。思うように筆が進まず、書いても自分が思い描く文章を綴れずに、いらいらすることがあるかと思えます。

そこで、最初は上手な文体、面白い小説でなくてもいいですから、完成させることを目標としてください。単に書き切るというのも意外と大変なことです。これは自戒も含んでいます。私自身、途中で書くのが嫌になって、放り出してしまふことも度々です。そのため、一作目は、なるべく短いものを書くようにしましょう。四〇〇字詰の原稿用紙で三〇枚程度が適当だと思えます。のっけから長編大作に挑もうとするのは、それまでろくに運動をしてこなかった人が、いきなりフルマラソンを走ろうとするようなもので、完走すらおぼつきません。文章についても、初めから自分の文体を持っている人は少ないと思いますから、好きな作家の模倣でも構わないので、まずは自由に書き連ねてみてください。ともかく一度、小説として仕上げてみるのが肝心です。

出来栄えうんぬんは別にして、苦心の末に作品を完成させた瞬間の充実感、

昂揚感は格別です。私なども、この気分を味わいたくて書き続けているのかもしれませんが。そうして一作、書き上げると、さらに次の作品が書きたくなくなります。習うよりも慣れるとはよくいったもので、小説も数をこなしていけば、文章も自然とうまくなっていきますし、構成も、工夫も、アイデアの捻り方も、どんどん巧みになっていきます。そうして習練を重ねることで、少しずつ自分なりの創作スタイル、文体を確立していつてください。

文学賞への挑戦

小説も、ある程度、満足はいくものが書けるようになってくると、必然、他人に読んでもらいたくなります。その方法もいろいろです。家族や友人といった身近な人たちに読んでもらうのもいいでしょうし、同人誌に参加されるのもいいでしょう。多少、費用はかかりますが、自費出版という手もありますし、パソコンが得意な方は、ブログに掲載されるのもいいかもしれません。

そうした多くの選択肢の中で、私が選んだのは、新人文学賞に応募することでした。動機は、知り合いに自分の小説を読んでもらうという行為が、なんとなく気恥ずかしかったことと、自

分の作品がどの程度のレベルなのかを、公正な形で知りたかったことでした。応募自体は無料ですし、小説を書き上げてしまえば、後は郵送するだけという気軽さも手伝っていました（主催者側に見れば、そんないい加減な気持ちで応募されては困ると不快に思われるかもしれません）。

新人文学賞には、大きく分けて二種類あります。ひとつは、将来、プロになれる素質を秘めた新人作家を発掘することを目的として、商業誌を発行している出版社が主催する中央の文学賞。もうひとつは、地域の文化振興などを目的として、各地の地元新聞社や自治体などが主催する地方文学賞です。

私は、主として地方文学賞を中心に応募していました。数ある地方文学賞の中で、私が目をつけたのは「九州が大衆文学賞」でした。故笹沢左保氏の提唱で始まった文学賞で、著名作家が審査員をつとめていることで知られていました（現在は森村誠一氏、夏樹静子氏、北方謙三氏）。もし、最終選考にまで残れば、プロの作家に批評してもらえらるというのが最大の魅力でした。しかし、地方文学賞とはいえ、全国公募ですから、最終選考まで残るのも容易なことではなく、毎年、応募しては落ち続けました。それでも途中で諦めなかったのは、最初に応募した

作品が三次選考まで残ったことが大きかったように思います。最終には残れなかったにせよ、それまで単なる自己満足に過ぎなかった私の小説を、多少なりとも面白いと思ってくれた人がいるという事実が励みになりました。

結局、五回目の挑戦で初めて最終選考に残り、そのまま佳作に入選しました。四年前のことです。事務局から受賞の電話を受けたとき、年甲斐もなく浮ついた気分になったことを、今でも鮮明に覚えています。応募のことは家族にも内緒にしていました。このとき初めて話しました。両親は、私の能力に多分な疑問を抱いている節がありますから、初めは信じられないといった顔をしましたが、それでも予想外の息子の快拳（？）を手放しで喜んでく



初めて訪れた佐賀県で吉野ヶ里遺跡を見物。
真中に写っているのは私の母です

大賞受賞時、授賞式での記念撮影前の様子。中央が私で、その背後に立っている方が北方謙三さんです



れました。最終選考における私の小説に対する評価は手厳しいものでしたが、審査員の皆さんの意見はとても参考になりました。

入選したことで、授賞式に招待され、生まれて初めて佐賀の地を踏むことができました。その際、同伴者が一人許されていたこともあり、読書好きの母が文学賞の授賞式がどういったものか興味があるようだったので、ちゃっかりと観光も兼ねて一緒に連れて行きました。思わぬことで親孝行の真似事ができ、石ひとつで三羽の鳥を落としたくらいの心持ちでした。

授賞式には、審査員の一人である夏樹静子氏が来賓として出席されていました。日本のアガサクリステイと称される高名な女性推理作家の聲咳に触れることができたのは、貴重な体験でした。実際にお会いした夏樹さんは、穏やかな品のいいご婦人で、私を見るなり意外そうな表情をされたのが印象的でした。後で、その理由を訊ねると、私の作品がたまたま姉妹の確執を題材にとった心理小説だったので、てっきり作者は女性だと思いきんでいたと笑いながらおっしゃっていました。その上で、私の作品を過分な言葉で誉めてくださいました。

このときの感激が忘れられず、翌年も応募しました。そして、念願の大賞を受賞することができました。前回は上回る出来たと密かに自負していただけに、喜びもひとしおでした。再び、佐賀に招待され、授賞式に出席しました。このような晴れがましい場が続けて招かれるなど、僥倖としかいいようがありませんでした。今度は大賞でしたので、スピーチを依頼されましたが、緊張のあまり、しどろもどろになってしまい、なにを喋ったのかよく覚えていません。二度目の授賞式の来賓は、北方謙三氏でした。ハードボイルド小説の名手で、最近では「水滸伝」などの重厚な歴史小説を手がけられている

北方さんは、イメージどおりの磊落な紳士で、プロ作家としての自信と迫力に満ちた方でした。会話も巧みで、執筆の際のエピソードを、ユーモアを交えて話してくれました。

受賞した作品は商業誌に掲載され、事務局である佐賀新聞のホームページにもアップされました（今も公開されているようなので、よろしかったら読んでみてください）。活字となった自分の小説を読んだときは、胸が震えました。二度の受賞は、私にとって生涯の思い出となる出来事でした。

最後に

二度の受賞は、私に多少の自信とさらなる意欲を与えてくれました。今は次の目標として、中央の出版社が主催する新人賞を目指しています。プロ作家を志す人たちと競うのですから、ハードルはいつそう高くなりますが、受賞の感動を忘れずに、挑戦していきたいと思えます。また、これまでは短編ばかり書いていましたが、今後は長編にも本格的に取り組んでいきたいと思っています。

小説を書くことは、うまくすると一生、付き合える趣味になります。自分だけの物語を紡ぐ愉悦を、一人でも多くの人に知ってほしいと願っています。